

落ち穂拾い

ミレーの代表作である「落ち穂拾い」(1857年)はパリのオルセー美術館が所蔵している。それが山梨県立美術館にもあるのだと、同僚のM氏が教えてくれた。調べてみると、確かに構図のよく似た1853年の作品が同美術館にあった。同美術館はミレー作品の収集に力を入れており、このほかにも、1857年の「落ち穂拾い」の直前に制作されたほぼ同じ構図の版画や、「種をまく人」(同名の絵がボストン美術館にある)など、約70点を所蔵している。

ミレーは、若いころは生活のために裸体画を多く描いていたが、後に自然の中で働く農民を描くことに集中するようになり、画風も「晩鐘」にみられるように、気高さを感じさせるものになっていった。貧しい農民の生活を積極的に、高い芸術性をもって描いた彼の作品は、農家に長男として生まれたことが大きく影響していると思われる。

山梨県立美術館で「落ち穂拾い」の前に立ったM氏は、麦と稲の違いはあるものの、その収穫の風景を見ているうちに、子供のころに過ごした農村の記憶が生々しくよみがえってきたのだという。天日乾燥する稲の束、足踏み式の機械での脱穀、麦踏みの思い出、等々。私もまた、幼い私の前に広がっていた出来秋の黄金に輝く稲の波と、その上に注いでいた陽光を、その上を駆けていた風を思い出すことがある。ミレーの見た落ち穂拾いの風景のなかにも、時代を超えて変わらぬ農村の光と風があったに違いないと思う。

しかし、今日のわが国では事情が変わりつつあるのかも知れない。農村から都市への人口の大量移動の時期から数十年が経過し、多くの日本人にとって、農村の記憶が弱まりつつあるように思われる。「落ち穂拾い」を、遠い昔の異国の風変わりな光景とみる受け止め方も出てくるかも知れない。農業者と都市生活者、農村と都市はそうのように隔てられたものではなく、食料や水という人間にとっての基本的な物資によって、また農業の持つ多面的機能の恩恵によって、お互いが強く結ばれているはずなのに。

また、わが国の絵画をめぐる状況を見ると、芸術とは無縁な出来事が目につく。バブル期に絵画が投機の対象となり、日本人が次々に世界の名画を買いあさったことは記憶に新しい。それらの絵画は、倉庫の奥深くしまわれて人の目に触れないものも多いし、現在では逆に、大変な安値で海外から買い戻されることもある。行方不明になっている名画もあるという。このような現象は、わが国の鑑賞者の意識にも微妙な影響を及ぼしていないだろうか。

「億円の絵」という目で見られ、値段でその輝きを測られるのだとしたら、悲しいことである。そういう目を見た時、ミレーのやわらかい色彩のなかに、人はどのような輝きを見いだすのだろうか。(もちろんこれは、山梨県立美術館のミレー収集について述べているのではない。同美術館の収集には思想が感じられると思う。)

「落ち穂拾い」を見る人の誰もが、そこに自らの内なる農村を見だし、その値段ではなくその絵自体の価値によって感銘を受ける、そんな当たり前のことがまだわが国では不可能ではないのだと信じたい。

本号では、「地域農業、そして地域社会農業へ」「EUの条件不利地域農業政策の教訓」「漁協系統における組織整備と事業・経営の動向」をとりあげた。